SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

報告：臨床人間学の試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜渦, 辰二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006878

報告：臨床人間学の試み

浜渦辰二

静岡大学哲学会第二十三回大会（二〇〇〇年十一月）のシンポジウムは「哲学・倫理学の教育をめぐって」と題され、斉藤和弘氏の「高校社会科の現場レポート――倫理の授業」と上利博規氏の「哲学教育の困難（a-poria）」という二つの提題が行われた（本誌掲載の二論文は、それぞれの提題と討論を踏まえて、書き直されたものである）。後者の提題に関連して、静岡大学人文学部人間学大講座での「臨床人間学」という新しい試みについて、筆者が代表して簡単に報告した。それは、現代的課題に向けた新しい科目としての「臨床人間学」を新設・開講したこと、および、その教育理念や可能性を追求するために科研費の補助を受けた共同研究「いのちとこころに関わる現代の諸問題の現場に臨む臨床人間学の方法論的構築」を行っていることを紹介したもので、本稿はその要旨である。

一、「臨床」ということで何を考えているのか

「臨床」と言えば、本学ではすでに、大学院の研究指導分野として「臨床心理学」が設置されており、学部の授業科目としても「臨床心理学」が開講されている。私たちの「臨床人間学」で使っている「臨床」という語は、この「臨床

心理学」との関係も意識しないではないが、むしろもっと大きな文脈で使おうとしたものである。

念頭にあるのは、一つには、中村雄二郎の『臨床の知とは何か』（一九九二年）[1]である。中村は同書のなかで、「個々の場所や時間のなかで、対象の多義性を十分考慮に入れながら、それとの交流のなかで事象を捉える方法」として「臨床の知」を提唱している。それは、「精神医学・文化人類学・比較行動学などにおいて、それと名づけられずに使われてきたもの」であって、「ただちに医学的臨床のための知や医学の分野の知を意味するのものでは……なくて、今日、領域を超えて必要とされていきている知の一般的な在り様を指すものである」としている。さらに、「近代的な〈科学の知〉」と対比して、「臨床の知は、個々の場合や場所を重視して深層の現実にかかわり、世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちに読み取り、捉える働きをする」とも述べている。私たちが念頭に置いているのは、こういう広義の「臨床」概念である。

もう一つ念頭にあるのは、大阪大学大学院文学研究科で倫理学専攻が「臨床哲学専攻」に改称された。「臨床哲学事始め」（一九九七年）[2]よると、「臨床哲学」とは、「ひとびとの「苦しみの場所」、つまりは社会の臨床的な場面に哲学的思考を差し込む試み」と言われている。さらに、「臨床（klinikos）、それはひとびとが苦しみ、横たわっているその場所をさします。いわば社会のベッド・サイドのことです。その場所で哲学になにが可能か、それをまさにその現場で問うてゆく思考の試みを、《臨床哲学》と名づけてみようと考えている」と述べられている。ここでは、「もっと問題発生の現場に即応した哲学の語り口を探ろう」（川本隆史）というところから出発しながら、「看護や介護の現場、教育の現場、家庭という場所、被災の場所、そしてこころがもだえ、悩んでいるその場所に」向かい、「哲学が大学という研究機関の外部に出てゆくことをも意味」するところへ進んだ[3]。これは、中村の「臨床」の広義の用法を踏まえつつも、「ベッド・サイド」という「臨床」の本来の意味をも組み入れようとするものと言えよう[4]。

このように、哲学や倫理学の分野においても、ここ数年、私たちが広く「臨床」あるいは「現場」という語で呼ぼうとしている方法の先駆的試みが現れている。「臨床」あるいは「現場」と「哲学」という、一見するとかけ離れたものを繋ぐ試みには、「現場」が求めている理論への要求と「哲学」が求めている具体への要求とを架橋しようとする努力が見られる[5]。他方、「応用倫理学」というアプローチによって、倫理学が応用さるべき現場へ向かうことを「臨床」という言葉で呼ぼうとする動きも見られる。すべての現場の問題が「倫理的」な問題であるとは限らず、また、「応用」という言い方も、「応用」すべき理論がすでに確立されていることを前提しているわけではないが、そこに見られる「現場」あるいは「臨床」へ向かう姿勢には、私たちとしても学ぶべきものが多い。そういう状況のなかで、私たちが携わっている「人間学」というのは、人間の全体性と人間の具体性とを同時に問題にしようとしている点において、これらの「哲学」や「倫理学」よりもいっそう、「臨床」という方法を確立する可能性を秘めていると言えよう。このような背景から、私たちは、「臨床」の新しい分野を拓くための方法を確立する必要があると考えてきた。

二、人間学大講座の歴史

ここで、いま私たちが属している静岡大学人文学部社会学科人間学大講座の歴史を簡単に振り返り、いま「人間学」ということで何を考えているかを確認しておきたい。

人間学大講座の前身を辿っていけば、一九四九年、静岡大学が創設された時、文理学部文科系統に哲学講座が設置されたことに始まる。その後、一九六五年に、文理学部が改組されて、人文学部と理学部に分かれた時、人文学部人文学科哲学専攻となった。一九六八年に、大岩キャンパスより大谷キャンパスへ移転したのを挟み、一九七五年に哲学のポ

ストの一つに心理学の先生をお迎えし、その後、哲学専攻と心理学専攻に分かれた一時期を経るが、何より大きな変化を迎えたのは、一九八二年の人文学科の改組により、社会学科が新設された時であった。

当時の文書によれば、それまでの人文学科は、哲学系、史学系、文学系の三系列から構成されていたが、新設の社会学科は、「現代社会の要請にこたえ、既設学科目についても新たに人間の文化を総合的に教育研究するような視野からの見直しを行い、哲学、史学系の学科目のうちから、理論哲学、実践哲学、心理学、考古学の四学科目を振り替えて新設」され、「広く人間の共同生活の諸形態及びその変化と発展について教育研究できるよう、社会思想、社会学、人類考古学の三大学科目により構成」された、と言う。特に、人間学大講座の前身となる大学科目「社会思想」について見れば、「社会と社会に生きる人間についての多角的な理解の推進を図ること」と目的とすると謳われている。

もう一つの大きな変化は、その十年後に訪れた。一九九二年、社会学科の改組により、人間学、社会学、文化人類学、歴史学の四大講座が設置された。これも当時の文書によれば[6]、「従来の「社会思想」は人間を個人よりも集団として捉える傾向が強く、社会科学的立場から経済構造と社会構造との関係等を重視して、社会の思想を分析・考察するものであった。そこでは社会の基本的構成員である個々の人間の問題を中心的に解明する余地が少なかった。そこで、こうした点を反省し、現代の危機に対処し、将来の福祉を目的として、「人間学」というパースペクティヴから教育・研究を行いたいと考える。「人間学」という分野は戦後発達して行動科学と深く関わるものであり、幅広い立場から人間を捉えようとするものである。今回の「人間学」への名称変更は、この立場に立って、経験科学としての多様な人間研究を統合し、また人間に関する総合的基礎論の提供を目指すものである」。ここに、現在の人間学大講座が誕生したわけである。

私たちは、その後、「人間学」の理念と方法を確立すべく、共同研究を重ね、その成果を金子晴勇編『人間学――そ

の歴史と射程―』（創文社、一九九五年）に結実させた。同書は、大きく歴史的考察と体系的考察に分かれ、私たちが伝統的なテキストを踏まえた研究とともに、新しい情報源に基づいて現代的な問題に取り組む姿勢をすでに予感させるものであった。いま、「臨床人間学」という構想で考えているのは、この後者で予感されていたものへともう一歩踏み込むことである。

三、臨床人間学の試み

前述のように、一九九二年の改組により誕生した人間学大講座では、一方で、哲学・倫理学・宗教学・美学といった伝統を継承して、古典的なテキストを読みながら考えるという研究と教育を続けながらも、他方で、同じ社会学科の他の講座（社会学、心理学、文化人類学、歴史学）の知見も取り入れ、更には、近年の先端諸科学にも学びながら、それら現代的な人間諸科学を総合するものとして、真の意味で学際的な研究と教育に取り組んできた。

そのなかでこれまでも、書物からの情報だけでなく、新聞・雑誌から、他分野の研究者との対話から、インターネットから[7]、市民との交流から、その他のさまざまな情報源を活用することを、研究と教育に取り入れてきた。新しい世紀を迎え、誕生から早や十年が経とうとしているいま、私たちは、「臨床人間学」として、これらの情報源からもう一歩さまざまな問題の現場へと踏み込んで、人間学の問題を具体的に考える手がかりとしたいと考え、その理念と方法を確立するため、二〇〇〇年度より二年間の計画で、科研費の補助を受けた共同研究「いのちとこころに関わる現代の諸問題の現場に臨む臨床人間学の方法論的構築」に着手した。

ここで「臨床」というのは、狭い意味での「ベッドサイド」ではなく、また、身体的あるいは精神的な問題を抱えて

いる人のみならず、広く、現代の諸問題に取り組んでいる人と接するなかで、こちらから与えられるものを提供しつつ、学ぶべきものを学ぶという仕方で、現場に臨むことを意味している。すなわち、新聞・雑誌・インターネットといった一方通行的な情報源のみならず、対話・面接・インタヴュー・交流・調査・フィールドワークといった相互的な対面関係のなかで、それまでに学んだことを現場で磨きながら、そのなかからいろいろと学び取ることに比重を置いた研究と教育である。

具体的には、研究分担者（六名）を三つのグループに分け、①医療技術と生命倫理、②精神医療と臨床心理、③宗教活動と芸術活動というテーマを担当し、それぞれの現場に前述のような手法で入っていくことによって、この新しい「臨床人間学」の方法を、いのちとこころに関わる現代の諸問題の現場に臨みながら構築することが、ここでの目標である。これら三つのテーマは、「いのち」と「こころ」に関わる現代の諸問題が現れている現場であるが、現代を生きる人間の問題として、決してバラバラの問題ではない。「臨床」によって得られた成果を、全体としての人間に目を向ける人間学の観点から、相互に関連づけて考察する必要があり、「臨床人間学」の意義もそこで初めて位置づけられることになる。

また、このような共同研究の一環として、冒頭にも述べた新しい教育科目としての「臨床人間学」を、二〇〇〇年度前期に、法学科・経済学科の夜間主コース三年次生向けの「総合科目」として実施した。とりあえずの試みではあったが、夜間主コースというのは、昼間は仕事をもっている人がほとんどで、その意味では現代の諸問題のさまざまな現場に居合わせている人たちとも言え、この人たちにいろいろ問題提起をして、返ってくる反応のなかで、ともに問題を考えてみたい、というのが狙いであった。

四、これからの展望

私たちの試みは始まったばかりではあるが、今年度末には、それなりの研究成果を出すことになっている。

他方、私たちの試みは、人間学大講座だけに止まるものではない波紋を広げてきている。

私たちの研究分担者たちは、この間それぞれに、学内プロジェクト・公開講座・連携講義・学外講義など、さまざまな学内外の活動において活躍してきている。しかも、それらは何らかの形で、「いのち」と「こころ」に関わる現代の諸問題と関連してきている。現在、私たちが関係する大学院としては、大学院人文社会科学研究科修士課程（比較地域文化専攻）があるが、数年前より博士課程構想が持ち上がっており、また、他方では、教育学部改組と連動した人文学部改組の案も練られており、どちらにおいても、私たちの試みが一つの役割を果たしそうな気配である。

注

（1）中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書、一九九二年。

（2）大阪大学文学部倫理学研究室『臨床哲学ニューズレター』創刊号、一九九七年。いまは、「大阪大学臨床哲学・倫理学研究室」ホームページ（http://bun70.let.osaka-u.ac.jp/index.htm）でも見られる。

（3）この大阪大学での試みに共鳴するものとして、臨床哲学研究会のメンバーでもある清水哲郎『医療現場に臨む哲学』（勁草書房、一九九七年）を参照。

（4）この時期以降、他にも、臨床社会学、臨床文化人類学、臨床政治学、臨床経済学、臨床法学、臨床歴史学というように、「臨床」という語を広義に使う用法が広まっていった。しかし、以上挙げたもののいくつかは、養老孟司の命名によるものであるが、

養老の『臨床哲学』（哲学書房、一九九七年）は、「哲学を横から見てときどき何か言いたくなる」という関心から、「それぞれの哲学者をとって、調べてみたい」「臨床哲学というのは、哲学の具体的な応用であると同時に、哲学者の臨床分析でもある」という主旨の書であり、本稿の脈絡からははずれる。それとともに私たちは、右のような「臨床」概念のインフレに組みするものではない。

（5）筆者自身、一九九三年夏から、静岡県・愛知県の病院・施設などで働く精神科医・臨床心理士たちと、「臨床と哲学の研究会」を続けてきている。これも、臨床に携わりながら、臨床の現場から哲学への関心を持つ精神科医と、教壇に立って哲学を教えながら、臨床の現場への関心を持つ筆者が、ともに研究し意見交換をする場として続けてきている研究会であり、臨床の現場にいる者と理論研究を行っている者との対話の場となっている。

（6）「社会学科・人文学科の学科改組について」一九九一年一月。

（7）そのため、一九九六年四月より、インターネット上に「人間学大講座」のホームページ（http://www.hss.shizuoka.ac.jp/shakai/ningen/ningen-j.html）を立ち上げ、さらに二〇〇〇年五月より、同ミラーサイト（http://anthropos.hss.shizuoka.ac.jp/ningen-j.html）をも立ち上げて、学生達の教育に役立てるのみならず、内外の学生達・研究者達に情報を発信するとともに、情報交換の場としても活用してきた。

（はまうず　しんじ　静岡大学教授）